

中川根ふる里通信

= 第72号 =

中川根ふる里通信
 昭和61年4月20日創刊
 編集・発行・連絡先
 〒429-0213
 静岡県橋原郡中川根町
 TEL0547-56-0015 上長尾859-6
 郵便振替口座00870-4-81556

太平洋戦争終戦後59年がすぎました。日本の平和が世界には通じない事を、皆な知ってほしいと思います。



『戦火の下の子どもたち』

〜イラク戦争の一年〜

■豊田直巳写真展
 ■島田市空襲関連資料展示等

平成16年7月22日(木)～7月28日(水)

10時から16時まで(最終日は15時まで) 入場無料

◆場所 プラザおおるり展示ホール
 ◆主催 島田市 ◆運営 島田市平和新念式典実行委員会

表紙掲載の、中川根町出身のフリージャーナリスト豊田直己さんの『戦火の下の子どもたち』というイラク戦争の一年の写真展示会に行ってみました。すでに、六月初旬から、東京や京都で、豊田さん独自や地雷廃絶日本キャンペーンなど参加団体の展示会が催されまわったので、全国版各新聞社が大きく報道されています。今回の写真展は、静岡地方版にて案内報道がありました。たので、多くの方が会場へ足を運んで下さったのではないかと想像しております。

感想は一言で、戦争は野蛮、罪もない子どもたちの生きる道を奪う……では、自分の身の危険を省みず、世界に、戦火の下で生きのびている子どもたちの姿を発信し続けている豊田さんに、熱いエールを贈りたいと思います。

当日、受付で配布されたチラシより今一度、イラク戦争の事を思い出していただきたく載せてみました。

◎朝日新聞ニッロ三年二月十四日 写真家

「イラクの子」撮り平和行脚 豊田直己さん

湾岸戦争の後遺症に苦しむイラクの子どもたちを撮り続ける写真家の豊田直己さん。東京都東村山市が、「この子たちの上に再び爆弾の雨を降らせていいのか」と、撮りためた写真パネルを抱えて、全国各地を講演して歩いている。「開戦必至とすれば、国境が閉鎖される前に再び現地に入る」と話す。

80年、父から中東の紛争地帯を中心に活動してきた。昨春の取材で、子どもたちの間に、米英軍が使用した劣化ウラン弾が原因と見られる白血病や癌が増えていることに、衝撃を受けた。

昨年12月に反核運動家や医師による「市民平和使節調査団」を組織。劣化ウラン弾が使われた南部や、ウエスト国境



アラブのおおるり会場での会場の様子



を案内し、医薬品の不足で死を待つばかりの子どもの姿をカメラに収めた。「日本の市民に現状を知ってほしい」と今後写真展と講演会に奔走する。

◎豊田さんからの案内状から

前略 中略

イラク取材で手一杯で、パレスチナの方は、その後の取材が出来ていません。

そんな中で、橋田さんたちが殺されたことはとても悔しいです。あの飄々として歩く姿、人を和ませるあの笑顔が、もう見られないと思うと、残念では方がありません。「イラク戦争」ではすでに43人とも言われる同業者が殺されているが、皆、それぞれジャーナリストとしての責任で取材を続けてきたのだと思うが……

しかし、初めから逃げる場所すらないイラクの人々が、一万余人も殺されていることも、同様にと忘れてはいけないと思う。後略



大井川の清流を考ふる 第七回

——大井川を見つめて八十年—— 山田 部

今年は足早に台風が発生し、例年にはない異常な気象状況であります。大井川水系は今のところ大きな被害はないものの、台風之余波による大雨は、河道を埋める砂礫の流入となり、河床が上昇し、住民は危惧しています。

中流域から沿岸域に至る大井川の現状を案内する前に、大井川の電源開発について再考案し、その本質に迫りたいと思います。

大井川は静岡県の最北端の井川山林に源を発し、北東は山梨県北西は長野県にそれぞれ接してきます。昭和三九年六月「南アルプス国立公園」に指定されてからは、観光面からも脚光をあびるようになり、現在南アルプスマウンテンパーク構想が県の事業として進められています。

井川山林が大倉喜八郎(現東海パルプ)創業者(写真左上)の所有となつたのは明治二八年であります。同社の社史によりますと、調査報告書「井川山林業管見」の中に、「井川山、三万町歩の森林は、たゞこの河(大井川)一筋によりて、その命脈を継ぐものというべし。溪林を経営せんと欲せば、すべからず先づこの河流の改良を實行せざるべからずや、知者を俟たずして明らかなり」とのべています。

急峻な奥地林、井川山林の開発は、大井川による木材流送が命の綱でありました。明治大正から昭和の初期まで、台風シーズンを避けた十月以降、木材流送(川狩)は毎年実施されました。

ところがこの木材流送にストップをかけたのが「ダム」であります。現在大井川水系には、

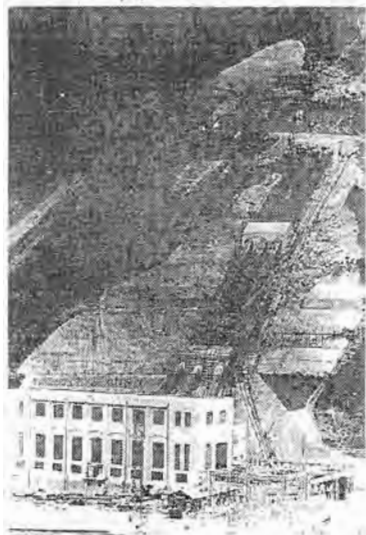
十五の発電所が運転されています。上流から、三軒小屋(中電)、中部電カ(特)、田代川第二、第一(東京電力)、赤石(中電)、赤石(中電)、畑薙第一、第二(中電)、井川(中電)、大井川(中電)、久野脇(中電)、川口(中電)、赤松(東海パルプ)の十三発電所、支流寸又川に湯山(中電)、大間(中電)の発電所があり、総発電量は七三万五、二五五KWに達します。

大井川最初の小山発電所、地名発電所は、ともに大井川特有の地形(蛇行)を利用し、山腹をトンネルで抜き、導水し、水流を全面的に止めるダムは構築しませんでした。

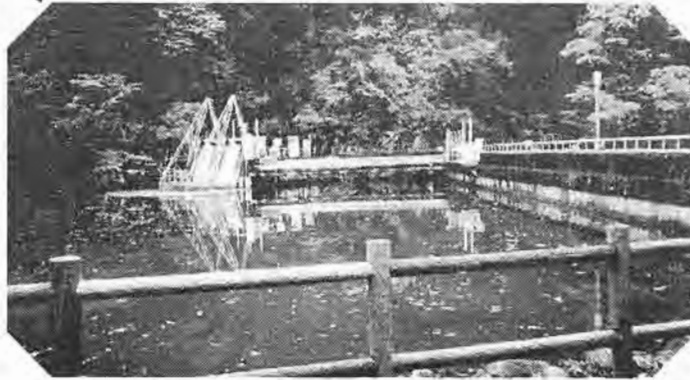
最初のダムは、大井川上流の東俣。

西俣合流点(三軒小屋上流)に田代ダム(写真下)がつけられ、東京電力が山梨県側に水を引いて、田代川第二、第一発電所(昭和二年運転開始)を完成しました。このダムは規模も小さく、切り刻りによる、大井川本川の瀬替えを行つた為、木材流送に大きな障害とはなりませんでしたが、中流域の崎平(本川根町)に建設された大井川発電所は、上流の奥泉(本川根町)にダムを設けて貯水し、一旦寸又川に引いて、寸又川ダムから寸又川の水を合せて導水するものであります。

この計画は昭和九年九月、静岡県知事から許可されましたが、申請者大井川電力(特)に木材流送補償の条件が出



建設中の大井川発電所





↑大井川ダムが出来る前の本川松町千頭前の大井川流送の集積場。(この下流へ筏で流送されていた)お舟の堰井。

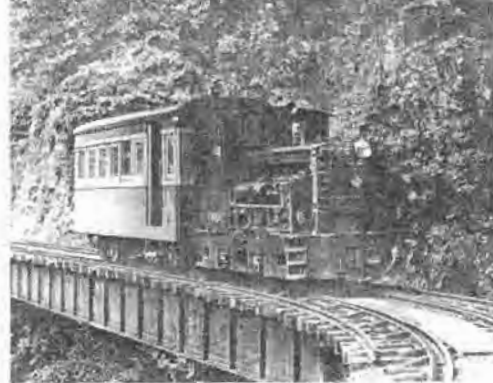
→大井川ダム(奥泉上流)で、上流より流送された木材を引き上げる様子。



され係争となったことは、ふる里通信第67号に詳述しました。当時としては、出力六万八千KWを誇る水系最大の発電施設となりました。又、利用水は大井川本川に戻されていきました。この地点(崎平)から下流への木材の流送や筏による搬送が行われ、地名(中川根町)からは舟下りの遊覧船が運航してまいりました。



↑地名の遊覧船乗り場についての、プロペラ船。



→森林軌道千頭～奥泉ダムまでは、大井川鉄道と同様の線路の敷かれ引上げられ木材を搬送。



長尾川水路橋、60年前に建設された当時のまの姿で、毎秒数十トン水を流している。



境川ダム、大井川発電所から約10km、大井川本川の水はここで一時、日光に当たる。

満州事変から始まる十五年戦争は、昭和十六年十二月八日、米英と相手とする太平洋戦争への突入となり、国策による電力統制は、日本発送電(株)を設立し、発電・送電を分離し、全国を九つの配電会社に編成し、電力統合が行われ、軍需産業への動力源として、大井川水系には久野脇発電所が建設されることになりました。

久野脇発電所の建設に伴い、大井川発電所の使用水は、全長十二kmを、榛原川の取水を含めて、導水トンネルで、長尾川及び中津川の水路橋を経て、境川ダムに至り、三津間の調整池を経て、久野脇発電所に送られて利水後は再び大井川本川に戻され、東海パルプの地名発電所に利水されていきました。

地名発電所への取水は、久野脇地先の河道に木床堰堤によって導水され、発電所へ送られて利水された後、本州に戻されていきます。この堰堤は木床のため、大水の時には、部分的に切れて流失したり、泥床したりするので、砂礫をとりに流し、土砂の堆積は見られず、河床の上昇もなかった。そのため、大井川の自然環境は損なわれることなく、魚族の逆上や水生昆

虫の棲息と河岸に植生する草木の育成が保たれていました。
(今ページ「私の大井川」の絵地図参照)

点描(その四)電源開発に拍車をかけた

大井川鉄道の全通とそれからの大井川

大井川鉄道の金谷—千頭間開通(昭和六年十二月)によって、大井川水系の電源開発は急速に前進を始めた。小山発電所地名発電所に続く三四番目は濁流ニ新小屋地点で取水の因代川第一発電所(ふじ里通信第67号参照)で、第五番目は支流寸又川の湯山発電所(昭和十年十月運転開始)、続いて大井川発電所(昭和十五年十月運転開始)は、奥泉ダム(大井川ダム)と補償問題を克服して稼動し、それと同時に、小山発電所は廃止され、また次いで七番目に、寸又川には大間発電所が建設(昭和十三年十二月完成)されています。

戦時中の昭和十五年十二月に、日本発送電(株)によって久野脇発電所が着工されました。久野脇発電所は、大井川発電所の放水を導水トンネルで送水し、十二km下流地点で発電するもので、再び木材流送(川村)の補償問題が登壇しました。

この発電所は、日本発送電(株)が計画したもので、昭和十六年には電力統合により、大井川発電所を統合し、木材流送の補償はそのまま継続するはずでありました。しかし、戦時中の国家策会社として統合設立した日本発送電(株)は、大井川電力(株)と木材流送補償の契約を更改するよう要求してきました。大井川川村組合、大井川材木商同業組合は、既得権を楯に、久野脇発電所建設に当って大要次の要求を提示しました。

- 一、川村材は久野脇発電所取水区間を陸送すること。
- 二、陸送日数は五日間とし、一切の経費は日本発送電負担とすること。
- 三、五日間を超えた場合は、その損害を補償すること。

しかし、日本発送電側は全国の未開発河川に多くの計画を持ち、大井川の流送補償が直ちに他におよぼす影響を考慮、これらの要求を極めて慎重に検討し対処しました。

昭和十七年には木材も国家統制となり、川村組合と材木商組合は、大井川材木株式会社、さらに静岡県材木株式会社島田支店として改組されていきました。

こうして流送補償問題は、双方対立のまま経過し、昭和十八年三月に、静岡県知事の仲裁で漸く落着くことになりました。

- 一、その要点を次に記述します。
- 二、木材の陸送方法は、日本発送電の運材計画による。
- 三、運材作業は日本発送電の負担において、日本発送電が施行すること。

三、流送費に相当する諸経費および陸送により免れうる流損本解消の利益分は、材主から日本発送電に提供する。

四、元大井川電力株式会社と、元大井川材木商同業組合、および大井川川村組合との間に締結した契約は解消せしめること。

五、日本発送電は、その契約解消の代償として、奥泉堰堤(現大井川ダム)より上流における木材関係に対し、金四十万円を材主に補償すること。

六、仲裁事項処理に必要な細目は、両者間で別に協定する。

七、この協定が整わぬ時は、県の裁定によること。

この結果、奥泉堰堤から揚げた木材は、大井川鉄道で運び、五和(金谷町)から大井川対岸の向谷(島田市)に、索道で渡りました。

この索道は昭和二十九年まで使用されたが、その後は自動車輸送に変わり、今ではケトルワイヤーも撤去されて、川原に残ったコンクリートの基礎が昔日の思い出を、わずかにその名



次回、昭和二十五年六月、国土総合開発法が施行され、静岡県は大井川総合開発計画を発表しました。電源開発（六ヶ所三貯水池）、農業用水利事業が主たるものです。が水をとられて今の大井川の姿になつたあゆみを記述します。

← 東海パルプ御地名発電所

残りとして留めています。

付記
久野脇発電所の建設には、戦時中のため労務者が無いので、朝鮮半島から強制的に連行されて来た、朝鮮人労務者（主に導水トンネル工事）、ロシロ人が十の工匠に分かれて従事し、犠牲者も出ています。この項を終るに当り、犠牲者のご冥福をお祈りします。



→ 大井川上流部で行われていた越中式鉄鉋（奥、河内川）



写真①②③ 大井川が川持枝は島田中向谷に集められた。
①は、向谷貯木場付近の越中舟と枝（大井川特有の6間枝）
② 向谷貯木場を水神様より見おろす。
③ 向谷の土場に集まった奥大井枝と選別する様子。

流れに乗って下る大井川上流部の枝木。



↑ 最近の久野脇発電所。
← 久野脇発電所で利水された水流は、塩郷塩堤が本渠までは中央排水口より、大井川へ戻されていた。水面は塩郷塩堤バフウォーター



私の大井川

地名出身
藤本都子

母なる海、父なる山という美しい対句があります。とすると、川はさすめ兄弟姉妹とでもいうことになるでしょうか。私にとっての川は、大井川です。子供のころ、きょうだいのように慣れ親しんだ、身近な川でした。

ふる里通信 70号に、地名の周囲を湾曲して流れている大井川を上空から見た写真がのっていました。久野邸と塩郷を分けて葛麓・石風呂と地名の間を流れ、笹間渡へと向かう間、大井川は幾重にも曲がりくねりながら流れていきます。その山と水が織り成す美しいたたずまいを、鶴山の七曲と称されてきました。

ダムでせき止められる前の大井川の川水は、冬の時期をのぞいて豊かな水量で、あくまでも清らかなので、川底の小石がくさりと見え、ときには魚影がよぎるのも見えました。

六月の鮎漁の解禁日には、大井川線(鉄道)に乗って、たくさんの太公望たちがやってきました。鮎釣りは、川の中に入って棹を投げ、じっとたたずんでいます。よく流されないでたつていられるものだな、と思ったものです。雨の日に、菅笠をかぶって釣っている人もいました。

とはいえ、川はいつも同じ表情をみせていたわけではありませぬ。台風ときは、おそろしいばかりに荒れ狂いました。大雨が降り続いて二、三日すると、夜寝入っている枕もとに、ゴオゴオと遠鳴りの地響きの音が耳について、目が覚めてしまいます。それは、台風の雨が上流から集まって、一挙に流れ下ってくるときの、すさまじいばかりにたぎっている音でした。

我が家は、ちやうど大井川線の地名駅のホームから、塩郷よりには

少し行ったところにあります。だから、裏河原の久野脇側の大水の音が山越えに聞こえてきたのです。子供心に、水があふれて峰を越えてきたら大変だと、まんじりともせず、ゴオゴオと響く音をきいていました。

夜が明けると、とびおきて、ごはんもそそごそに、河原の見えるところまで行きました。目の前に、渦巻き逆巻き、泥の色の水が、川幅いっぱいにはひろがって、ものすごい速さで流れています。上流からえぐりとなってきたらしい木が、浮きつ沈みつ回転しながら、あつという間に下流へと運ばれていきます。

普段の川の流れると、あまりの変わりようには、あんぐり口をあけたまま魅入られるように、たちすくんでいました。小さなところで見ているのに、すさまじい川の勢いに吸い込まれてしまい、もうは錯覚をおこします。

台風が去って何日かすると、さすがの大水もおさまります。あんなに荒れ狂っていた濁流が、うそのように静まっています。置き去りにされた流木を、感でひきあげている大人がいます。河原に堆積していたゴミなどの類も、すべて流されてしまつて、みょうにカラシとした感じがします。流れの真中の砂州には、えいたグミの木が、下流に引っぱられたかっこうで立ちどまっています。よくがんばったね、と声をかけてやりたくありません。こんな大水のときは、西地名の田んぼは、冠水してしまいます。稲が頭まで水に漬かってしまつて、いことも、何度かあります。それは、なんとも無残な情景で、子供心にも痛ましく感じました。

しかし、こうして暴れようを見せるのは、年に何度かのことで、あとは豊かな流れは、さまたげない恵みをもたらしてくれていたので、たとえは、鮎をはじめとする川魚、そして川根のお茶のおいしさを作り上げてくれる川霧など。

でも、私たち子供にとつての何よりの楽しみは、夏の川遊びです。小学校に上がる前は、西地名へ導水するために山際に引かれていく疎水が、プールがわりでした。手をついて、なんとか顔を水面から出して、足だけバチヤバチヤやって、泳いだ気分を味わいました。もちろん水着なんでものは、たれももっていませんから、パンツだけでとか、素っ裸で水とたわむれました。

小学生になって、年上の人といっしょなら、大井川の本流の枝川で流れがゆるくて浅いところで泳ぎました。泳ぐといつても、ほとんどが自己流の犬かきでした。だいたい、川水は外がどんなに暑い日でも、冷たいので、長いこと漬かっているといられます。せいぜい五六分もしたら、いったん水からあがって、こうら平しをしないと、冷え切ってしまう。

唇が青から紫色になり、鳥肌がたつて、ふるえがきたら、ちよつと長く水中にいますたということですが、これは、子供ながらも自己判断して、そろそろかなと思つたら水から出て太陽に暖めてもらいました。また、いっしょに泳いでいる仲間の様子もときどき見て、「はあ、あがったほうがええよ」と注意していました。これは、年上の子から、順に伝えられた智恵でした。大人たちが、ついていたわけではあります。異年齢の子供集団の中で、教えあい、伝えあうという自然のシステムが、生きていた実例だと、今にして思います。本当に、どうしてあんなに泳ぐのが楽しかったのか、不思議に思います。

小学校では、夏休みの計画表を作られました。私は、朝起きる時間と夜寝る時間を書いて、あとは水泳にしました。たぶん、書き直すように言われた記憶があります。しゅしゅ、勉強の時間と手伝いの時間を、書きたくまりました。

お昼の二時間だけは、休まなければいけないといわれて、十二時から一時まで、じっと待っていました。あの待っている時間の長かつ

たこと、三年生くらいまでは、まじめに、一時になつてから午後の泳ぎに出かけました。

ところが、だんだん悪知恵が働くようになって、ふと、何もしないで家にいることはないじゃないか、一時までは休んでいけばいいのだから、少し前にでかけて準備していれば一時になつたらすぐ川にはいれると思いつきました。わずかの十分か十五分くらいをかせいだけですが、何だか、すごい得をしたような気持ちでした。そうして、もちろんせつせつと、泳ぎました。

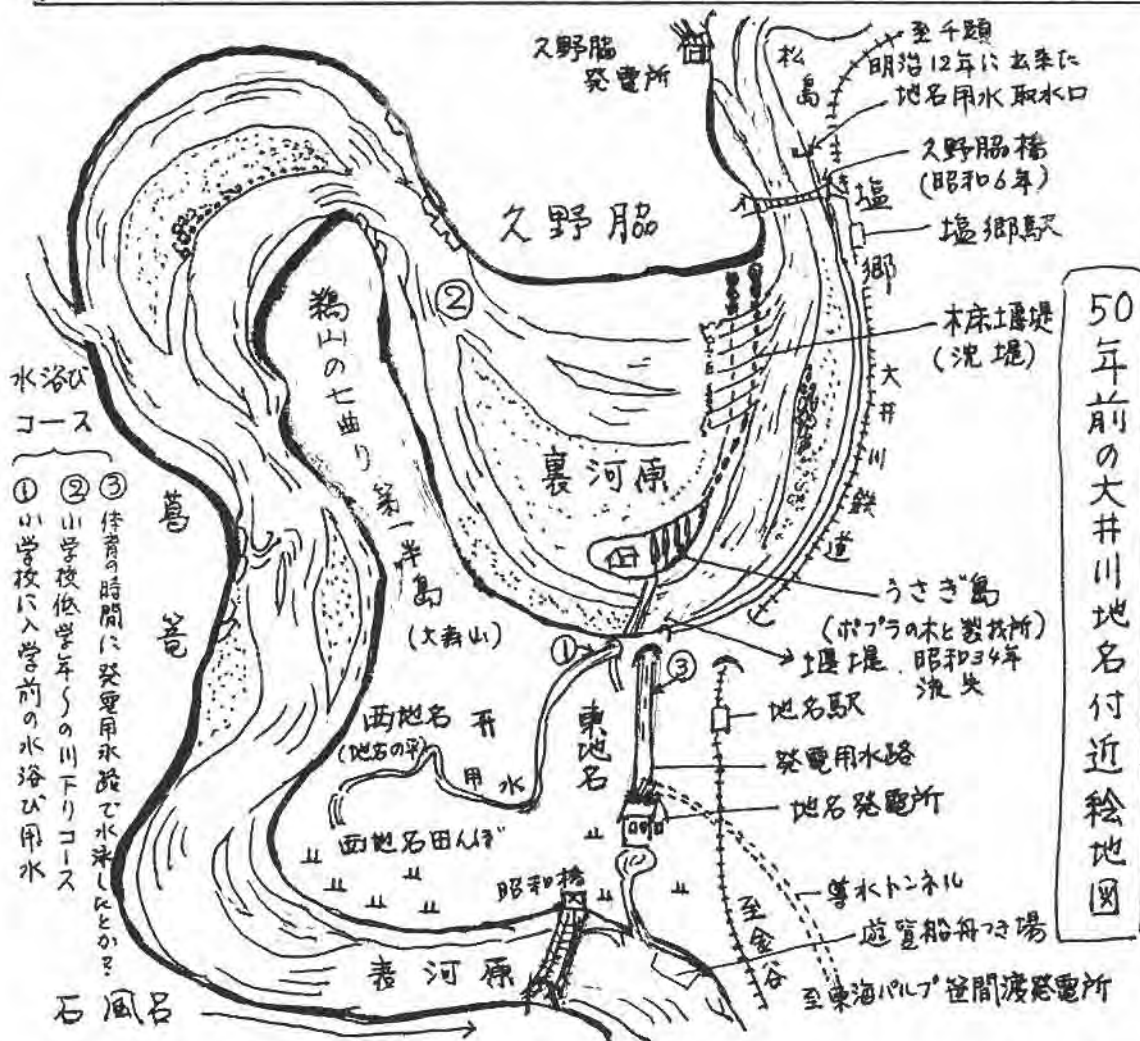
子どもの頃の写真のなかにも、真黒に日焼けして、目鼻がなければ顔とはわからない一枚があります。あのころ、夏は思いつき思いついて、秋から冬になる間に少しずつ薄れていって、春よつやくもとの色になりかきました。でも、それもつかの間で、また、真黒になるといふ繰り返してました。

川で泳いでいたせいか、海水浴にいったとき、からだのすくなく、何にもしないのに浮かんでしまいました。これは、酸素とブカブカ浮かんでいるうちに、いつのまにか海岸から離れてしまっているのに大変な思いをしたことがあります。

海は、泳いでいるときはいいのですが、あとで塩がベタベタして、あんまり好きになれません。プールも、たまった水の中でいろんな人が泳いでいるうえに、消毒の塩素が気になつて、ためでした。どうやら、私は、子どもの頃に、大井川で一生分泳いでしまつたようです。

いまでも、裏河原からぐるりと表河原まで、泳いだ場所のそこそこが、どんな淵だったか、どんな水色をしてたか、記憶がよみがえります。カッパが構んでいるといわれていた淵の、深いエメラルド色に、——なんてきれいな——と、うっとりを見入ったことも忘れられません。

さまたまな水のたたずまいを生んでくれ、いっはい楽し



い思い出を炸してくれた。豊かな流れの大井川。いま河原砂漠といわれるほど、無残なすがたをさらけだしている大井川に、再びとどろくような水がながれ、鮎やうなぎがのぼり、子どもたちの弾む声が戻ってくる日が近いことを願っています。

50年前の大井川地名付近絵地図

東京のかたすみから(四三)

テレビの始めから終りまで

テレビ元祖の晩年 渡邊 實夫

ソビエトとの東西冷戦の終結の道を開いたレーガン元アメリカ大統領は、自らアルツハイマー病を公表して、十年間の闘病生活の後、先日六月五日に九十三歳で死去した。どんな人もアルツハイマー病になる可能性があることを世界に示した。

それで思い出するのは、テレビ界の大先輩でラジオはNHK、テレビは民間放送」といわれたNTV日本テレビの創始者、内務官僚出身の正力松太郎氏である。

ラジオ放送は大正末期、社団法人東京、大阪、名古屋の各放送局が開始した。それが合併して日本放送協会(NHK)が生まれ、そのNHKが育て上げた肥沃な土壌の上に、昭和二十六年、民放ラジオが産声をあげ、繁栄を遂げたもので、正にNHKのおかげである。

ところがテレビは違ふ。昭和二十八年NHKに先かけて、民放の日本テレビの正力さんがテレビ局の予備免許第一号を受け、放送を始めたのである。

思えばサラリーマンの初任給一万円時代、二十五万円にするテレビ受像機は、庶民にとって『高嶺の花』であった。正力さんは大量のテレビ受像機を盛り場や駅前広場に設置し、ナイターやプロレスの実況中継を軸にして、街頭進出を図り、日本で初めて民間放送のテレビをわれわれ大衆に見せてくれたのである。

その偉大なるテレビの元祖、正力さんでさえも、晩年は日本テレビの社内や職場を痴呆で徘徊し、社員を

街頭でテレビを見る群衆



公開テレビや、テレビのある家に来て来た隣近所の人々

困らせ、生病老死の末路を歩んだ。

日本テレビの友人によると、正力翁の頑張りとは君臨統治ぶりには強烈であった。また、当時の日本テレビの社員の派手奉公、忍耐忍従、主君への服従ぶりは極端であった。

同業後発局のわれわれは、アメリカナイズされた日本テレビを、立派なものだと評価し敬服したりもした。その翁の切り開いた日本の、テレビ放送産業は、一丁時代の今日まで、輝かしい発展を続け、広告業界の雄となった。



建設中の東京タワー



完成した東京タワー

翁は日本テレビ本社のある麹町に、日本最初のテレビ塔(百五十四メートル)を建設し、放送を開始するやテレビは、瞬く間に大衆に浸透した。

この影響で東京にテレビ局開設ブームが起り、都心にアンテナタワーの乱立が予想された。それでは無駄が多過ぎるといふことで、放送界の意向は、新局誕生を契機に、共同タワー建設の方向に教られた。

後発局は芝公園に関東一円をカバーする東京タワー(三百三十三メートル)の共同建設にかかった。しかし翁は新宿に、東京タワーより二倍高い六百メートルの世界最高の正力タワーを建設するから、と宣言して、日本テレビは一社のみ、相乗りをしなかった。

その三年前に建てた日本テレビの麹町のアンテナの高さは、建設予定の東京タワーよりずっと低く、関東一円に放送するには不十分なものであった。当時の結果として、関東一帯では、他の局に比べて、日本テレビだけが映りが悪く、日本テレビは「ダメテレビ」と言われ、広告スポンサーや、代理店、視聴者の評判が悪く、営業成績も振るわず、会社全体が苦勞していた。

それでも翁は頑として「オレの目の黒いうちは、ダメだ」と、東京タワーへの移転は認めなかった。翁にはオレが最初に始めたテレビだからというプライドのみでなく、なにか、独特の考えがあったらしい。

新宿での六百メートルの正力タワーの建設計画は、費用や経営、運営面、地震対策などの見通しが立たずに延び延びになっていった。この遅れに翁は「びれを切らし、部下に速くくんの天継ぎ早の催促をした。困りきった側近は、次のような秘策を捻り出した。即ち、予定地を整地し

て、式典用紅白幕を張り、翁のご臨場のもと、神主を招き、ス
 コップ、鍬を用意して、見せかけ地鎮祭を行った。翁の鍬入
 れ式で無事、式典は終わった。

事後担当者は、土地を復元し、建設工具を片付け、式典用
 具を麹町の日本テレビに持ち帰り、正力タワー構想実現の翁
 の気休め着工式は一件落着いた。

それから間もなくのこと、昭和四十四年十月九日朝、私が
 出社すると受付嬢から「日本テレビの岩本技術部長がお待ち
 です」との電話をうけた。物静かで謹言実直な岩本さんが
 真剣な面持ちで、「東京タワーの工事図面を見せて欲しい」と
 言う。

大先輩の日本テレビに、こちらからお願いで指導を受
 けに行くことはあったが、来訪しての頼まれごとは初めて
 で、世の中不思議なこともあるものだと思いはながら、図面探
 しに行こうとしたり、「実は今朝がた午前一時に正力翁
 が亡くなったんですよ」と聞かされた。

翁の死後九時間弱で日本テレビ技術陣は、東京タワーへ
 の移転作戦を展開し、一年後の昭和四十五年十一月十日、
 晴れて移転工事は完了し、他局なみのサービスエリアとな
 った。

その後の日本テレビの躍進ぶりは目覚ましく、視聴率
 第一位となつて久しく、営業収入も群を抜いた。
 めでたしめでたし。

八十五歳まで頑張った老後の翁の存在が、日本テレビに
 とつて、いかに重たいものであったかと同情を禁じ得ない。
 又私は翁から人間の本质を学んだ。

(二〇〇四年六月 記)



徳山小学校同級会(昭和三十二年三月卒業生)

本川根町 大村勝枝(旧姓中沢)

一番茶もようやく終えた五月二十九日(土)、SLの
 川根路の里 駿河徳山はすばらしい五月晴、新緑に
 つつまれ、昼中は初夏を思わせる日和でありました。
 還暦を迎えた私達は、徳山の加登屋さんと、何十年
 ぶりと同級会が開催されました。(写真左・大村さんは(げん
 きでね)の方)加登
 屋さんは、成人式の後
 で集合した、記念す
 べき会場でもあり
 ました。

地元に住んでいる
 入道で、お手伝いし
 ようと、私も千頭よ
 り胸をときめかし
 て、車を走らせ、
 会場に着きます
 と、懐かしい顔ぶれ
 が五、六人来ていま
 した。

「ああ、やっぱり
 皆な今日の日を楽
 しみに心待ちして
 いてくれたんだな
 」と思いはながら、

数名で受付や会費を預けているうちに、挨拶もささやかに、幼なじみの言葉が飛びかい、五十人近くいた同級生のうち二十九名が出席して下さりました。

お仕事の都合や、御家族のことやうて、欠席した方の葉書を讀み上げて下さりながら、幹事の鈴木俊三君(前ベシ写真(うれしいました))が皆さんにと、昭和二十六年、入学してまもなく春の遠足後の記念写真、運動会、学芸会卒業式の思い出の集合写真など、それぞれ六枚をB4の大きさに拡大して、名簿と共に大きな袋に入れて、一人一人に手渡しして下さり、ほんとうに懐かしい思い出のつまった心のもった贈りものに目がしらが、熱くなりました。皆さんこれには大歓声がおこり、いつまでもおさまりませんでした。

当時は戦争後、上海より五才の時引き揚げて来た人もいて、幼少の頃の話をしたり、四年生の時転出して、五十年ぶりに会った人もいて、あまりにも時が流れすぎ、成人式以来四十年ぶりの人とか、誰だったか?と一瞬思い出せない人もいました。〇〇ちゃんとか〇〇坊主とか、あだ名で呼んだり、もういつの間にか小学校時代に戻り、幼い頃のままだになって、話に花が咲きました。

当時の学校は学芸会が一番大きな行事だったようでした。歌や劇、舞踊、器楽など、父兄も弁当持ちでの参観だった為、学年ごと、この日のために頑張りました。「いはばの白うさぎ」「うらしまたろう」...とか話がつきません。二年、三年の担任は吉田しづる先生でした。当時いらみがわさ、一人ずつフレゾール石けん液で洗って下さり、大勢の子供で手がふやけてしまったり、(のびもたくさんいました)蛔虫がいる子供が多く、海人草を何度も



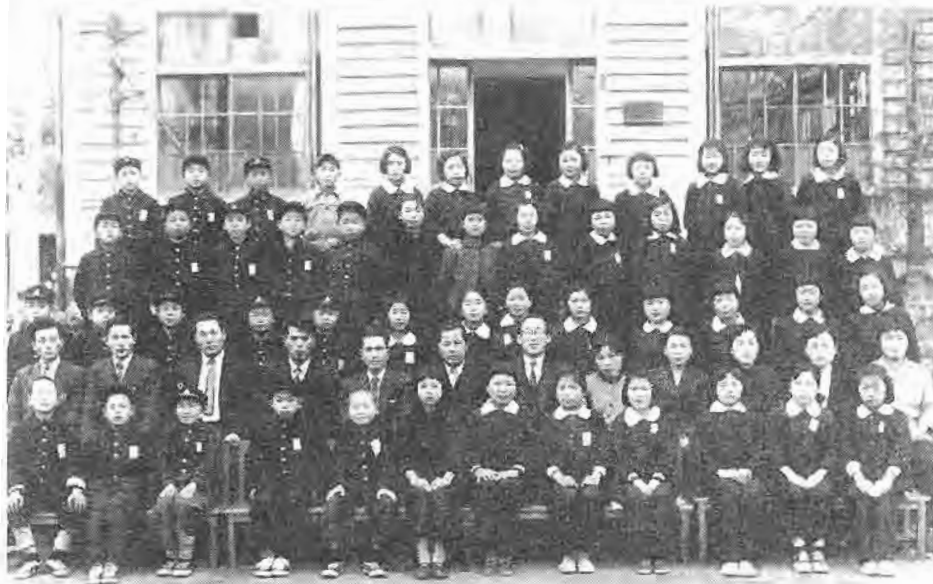
二年生の時の写真
中央が吉田しづる先生

と煎じて飲ませて下さったり、受持ちのほか、着替と、やさしいお姉さんのように何役もこなして下さる先生でした。

一番皆が忘れたかった恐い先生は、四年の大石正之先生で、登校拒否や早退が多かったように思い出されます。子供心に焼きついている

ことは、「そろばんが出来ないのは、覚える気がない」と言っていて、教材の大きさをそろばんをメチメチにこわしておこった事でした。時には「職員室に立っている」と言ったり、いつもピリピリしていました。音楽発表会のコーラスなど優秀な成績を修めましたが、スパルタ式で、今の時代ではとても考えられない教え方でした。

五、六年は温厚な野崎年男先生に変わり、皆が喜びました。もりあおがえるの研究など熱心に教えてくれ



放課後は散歩につれて行ってくれ、よく写真を撮って下さいました。先生はもう地帯されたそうです。懐かしい話に花を咲かせているうちに、三時より始めた会も、夜七時過ぎとなくなってしま、あつという間に最後の一本メめの時間となり、全員健康で又の再会を念願し、名残りはつきません散会致しました。

その後十数名で片づけをしてから、加登屋さんの横側の水田にある、ときどきの池へ堂を見に行くことになりました。真つ暗な夜道を歩き、ベンチに座っていると八時頃でした。堂が

ニ三四ピカッピ
光をはなっている
ではありませんか
田舎にいてもな
かなか見ること
が出来ない、あの
堂の光でした。
「なんと懐しい
走馬灯のごと
く一瞬、幼き頃
にもどったか
錯覚しました。
あの頃は、この辺
は田んぼでした。
（おまの、おまの）
写真の式、卒業式
の担任、一年担任
の先生、三年担任
の先生、五年担任
の先生、六年担任
の先生、右野崎先生
、右野崎先生、右野崎先生

堂のポツポツとして、何とも言えない妖艶の光が暗闇の水辺へと消えました。そーっと手の平に乗せて、ずつと見つめていたような心の癒を、これから大事に、してゆきたいものだ、しみじみ思いました。ほんとに楽しく、うれしい同級会でありました。幹事さんや心よくお世話下さった加登屋様の皆様にもお礼申し上げます。

※徳山小学校卒業生の一人として、学校統合記念誌より
お届けします。



徳山小学校の歴史を思いおが一杯つまった記念誌です。扉文字を書いた方は勝山三郎先生

徳山小学校は、明治七年頃、学割発布にしたがって、大泉院の本堂を教室として、大徳舎と称して創立されたのが始まりで、九十八年の長い歳月が流れて、立派な伝統と歴史をつづけて参りました。
徳山小学校は、なつかしい心のふるさと、こゝで学び、巣立っている、三千人近い卒業生一人一人の胸に生き続けて

いるに違ひありません。堂々とした校舎、想い出の数々。母校徳山小学校は昭和四十六年四月一日を以て、徳山地区内に新設された。中川根第一小学校に発展統合するに至りました。

徳山小学校を閉じるに当り、『学校統合記念誌』が発刊されました。発行責任者は当時のPTA会長の直里勇三様、中村弘校長先生のご指導のもと、百ページ余の立派な記念誌が出来上りました。三十余年すぎた現在、記念誌をひもといてみますと、新たな感動がわきあがり、胸をあたつくします。当時、記念誌発刊にたずさわったPもTも、町教育委員会、中川根町、寄稿された方々本当によい歴史を残して下さいます。ありがとうございさうに。中川根第一小学校も早三十余年の歴史となりました。こちらも新しい校風が育っていることでしょう。徳山小学校同級会の感動と共に、母校の統合記念誌にもお力を貸していただきまいた。

ふる里 いろいろ

おわり

★五月中旬第70号を発刊して三ヶ月余、昨年の冷夏は何のその猛烈な暑さの夏を迎えまい。それも長い長い暑さとの戦いの連続でした。これは、川根地域だけのものではなく、むしろ都市部の地域の方が、冷房エネルギーや排気ガスで夜間も温度が下らなく、寝苦しい日々を連続だったろうと心配しております。こちらは七月下旬のこうなる様な暑さの中でも、落日とともに気温は下りはじめ、翌朝には涼しくなっており、比較的すこしやすかったのではないかと思っております。これも山に樹木があるからだと感謝しております。皆様のところはどうかだったでしょうか。暑中お見舞い、残暑お見舞い併せて申し上げます。

★集中豪雨と台風

七月上旬に静岡中西南部を襲った極地的集中豪雨を皮切りに、全国各地に降雨災害が発生しました。皆様のところは無事だったでしょうか。特に新潟県三条市付近と福井市の集中豪雨は、テレビを見ていても、みるみる浸水して行って、家も、家財も人命すら危険な状況になっておりました。

今年は台風の発生と日本列島襲来の数が多いことでは、うー、か、同じ地点が多く雲がかかり大雨と降りせ、同じコースを進んで、風害、雨害をもたらしています。特に、八月末の台風16号は大潮と重なり、高潮の恐れをまざまざと見せてくれました。雲が常におしよせてきた、紀伊半島と四国地方の様子も居ながらにして判りました。昨年秋訪れた高知果物部川、徳島県那賀川、上流部木頭村、中流部鷲敷町はどうであつたか、と心配しております。

こちらはかなりの降雨量でありました。これといふに、災害も発生せず、通常の営みとしております。が、台風や不連続線の雲がひとたび南アルプスの山々にかかりますと、年間雨量4000ミリを受けける山地帯も、大洪水は免れません。運の良し悪しと、受けとめる大地抱擁力の良し悪し(山林の有無)、川の流水の良し悪しなど、日常の個人の生活では守り切れない所に、大災害の発生源があるように思えます。改めて、国土を守る重要性を感じているこの頃です。

★ちよっといい事、こわい事

今年も事務所(ふる里通信社)の軒先に燕が巣造りをしてました(例年より十日ほど早かった)七月上旬巣立った。その瞬間、三羽の子燕は、事務所に入って来て、私の頭上に立ち、大さわぎです。私は静かに立ちこり、静々と歩き、屋外廊下に進みますと、やつと

電線に飛び立ちました。貴重な体験をした事と、とてもいい気持ちにはなりました。にしき木の下の草取りをしようとして手を出した。その時、大きな蜂の巣にぶれそうになりました。ハッと手を引く。胸をなで下しました。手を出さなければ恐くはないので、草取りや水のかけは気に付けて、そのままにしています。巣も大きくなると、子蜂の頭大になりまーた、地面から50cm、台風の多い年は、蜂の巣も後位置に作るとか。

八月十四日……お盆の夜星を彩る花火……
中川根夏まつりが盛大に行われました。



2004 中川根夏まつり

日時 平成16年8月14日(主)
 PM6:00~PM9:00 雨天の場合は、21日(主)に延期

会場 中川根町高郷地区
 大井川河川敷広場

テーマ 「物より思い出」

PROGRAM

中学生以下対象
 6:00 景品付き帽子投げ
 花火セット、お菓子、文房具などいろいろなお品が当たる。

6:25 オープニング タンゴコンサート
 川根高等学校ダンスバンドと「エッセー」グループの
 楽しいライブコンサートです。

6:50 盆踊り 第1部
 7:15 鉦太鼓
 7:30 花火 朝霧ワイドウェーブスターメインほか
 7:35 赤石太鼓 第1部
 7:45 花火 スターメインほか
 7:55 盆踊り 第2部
 8:20 赤石太鼓 第2部 と手筒花火の競演(特設ステージ)
 川根高等学校ダンスバンドによる演奏(赤石太鼓)に合わせ、
 これまでにない花火の「手筒花火」を打ち上げます。

8:35 閉会式(ファイナルスターメインほか)

主催 中川根町ふるさと再発見事業推進本部
 実施主体 中川根夏まつり実行委員会

中川根夏まつり実行委員会、委員長 杉山嘉英町長
 ごあいさつ

「中川根夏まつり」が、主催の実行委員会の皆様をはじめ多くの関係者のご尽力のもとに開催できますことに、心より感謝とお礼を申し上げます。

ご承知のとおり、中川根町は来年の九月二十日に本川根町と合併し、新しく「川根本町」に生まれ変わります。そこで、中川根町では最後の年度となる今年度は「ふるさと再発見事業」を年度を通じて開催し、地域の魅力や資源を再発見し、これからの町づくりの活力にしようとして考えています。

その柱となる事業の一つが夏まつりです。今回の夏まつりは企画の段階から多くの町民有志の参加を得て、準備・検討を進めてきました。また町内外の多くの方々や団体、組織のご理解とご協力、スタッフの方々のご尽力で、多くの夏まつり協賛金の協力も頂きました。

行政も住民もそれぞれの立場で、それぞれ力を活かしながら、心一つに目的に向かって協働していくことが、これからの地域づくりには必要です。

今回の夏まつりを通じて生まれた町民や町外の協力者、スタッフの連帯感がこれからの新町建設に生かされ、参加者一人一人の心が通じ合い、さわやかな感動を生む「中川根夏まつり」であることを祈念します。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

一部 千円 200円

皆様へ定期購読がふる里通信の発行を支えます。基本は年4回の発行ですがこの一年間は、かたがひの増刊にふる里予定です。(中川根町名があるうちに80号まで発行を予定しております。)

購読料が切れな方には、振替用紙を同封致しますから、引き続き、ご購読いただきたく、お願い致します。もしも、購読を止めたい時や、住所変更のりも、是非、ご連絡下さい。

郵便振替通知番号

00870-4-81556

発行責任者住所 〒428-0313

静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6

氏名 小沢 節子

TEL. 0547-56-0015

FAX 0547-56-0020

天川

星非

中川

中川

中川

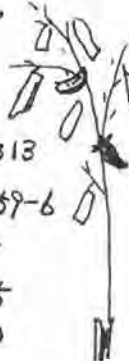
★中川根夏まつりにさきかけて、中川根町より「ふるさと再発見事業」の夏まつり②大運動会③産業文化祭」の開催と、ご来町のご案内が皆様のところへ届いたかと思えます。今年度にて中川根町も終了するという事で、町ゆかりの方々にも、ご案内を出したいとの主目的の説明を受け、門外不出を守ったふる里通信名簿を後の方に渡しました。

★花火等夏まつり協賛金にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

★協賛金ごらみのご案内を受け取り、ちよつと、とまどつた皆様、ふる里通信を通してのご案内にすればよかつた、と反省しております。本當にゆけありませんでした。

★当日会場にいらつちよつて下さつた皆様、いっしょに夏まつりを楽しんでいただけました。花火もきれいでしたね。

★今後の大運動会、産業文化祭でもお待ちしております。是非、ふる里中川根町にいらつちよつて下さい。



★

八月十四日から始まり二週間、世界のスポーツの祭典、オリンピックが、近代オリンピック発生の地アテネで開かれました。時差の関係上、午前三時頃から決勝種目が多くて、体調不良、寝不足でしたが、男子体操団体、女子マラソン、競泳決勝は見ました。感動しました。四年に一度のオリンピックにすつかりのほせきした。ふる里通信72号も多少の遅れが発生しました。

★今回、原稿をいただいた山田新市さん、中野幸造さんからの手紙、九月一日、上長尾地域防災訓練の事は、次回73号にてお送りします。皆様よりの寄稿をお待ちしております。

★

★表紙のうーページにかけての展示会場では同時に、島田市の太平洋戦争中に受けた島田空襲や戦時中の生活用品等の展示がありました。特に、昭和二十年七月二十六日午前八時三十分、扇町に、八月六日広島に投下された原子爆弾の模擬爆弾が実験に投下され、大きな被害が出ていた様子を目撃しました。二十六日には「扇町被爆者慰霊のつどい」も開催されたという事でした。当時の島田市が広島原爆の模擬練習地で、一瞬に全市を失い、六十年すも、お放射能被害におびえる被爆者の事を考える時、人間の罪の深さを又知るのですが。

